小説[illegible]二[illegible]

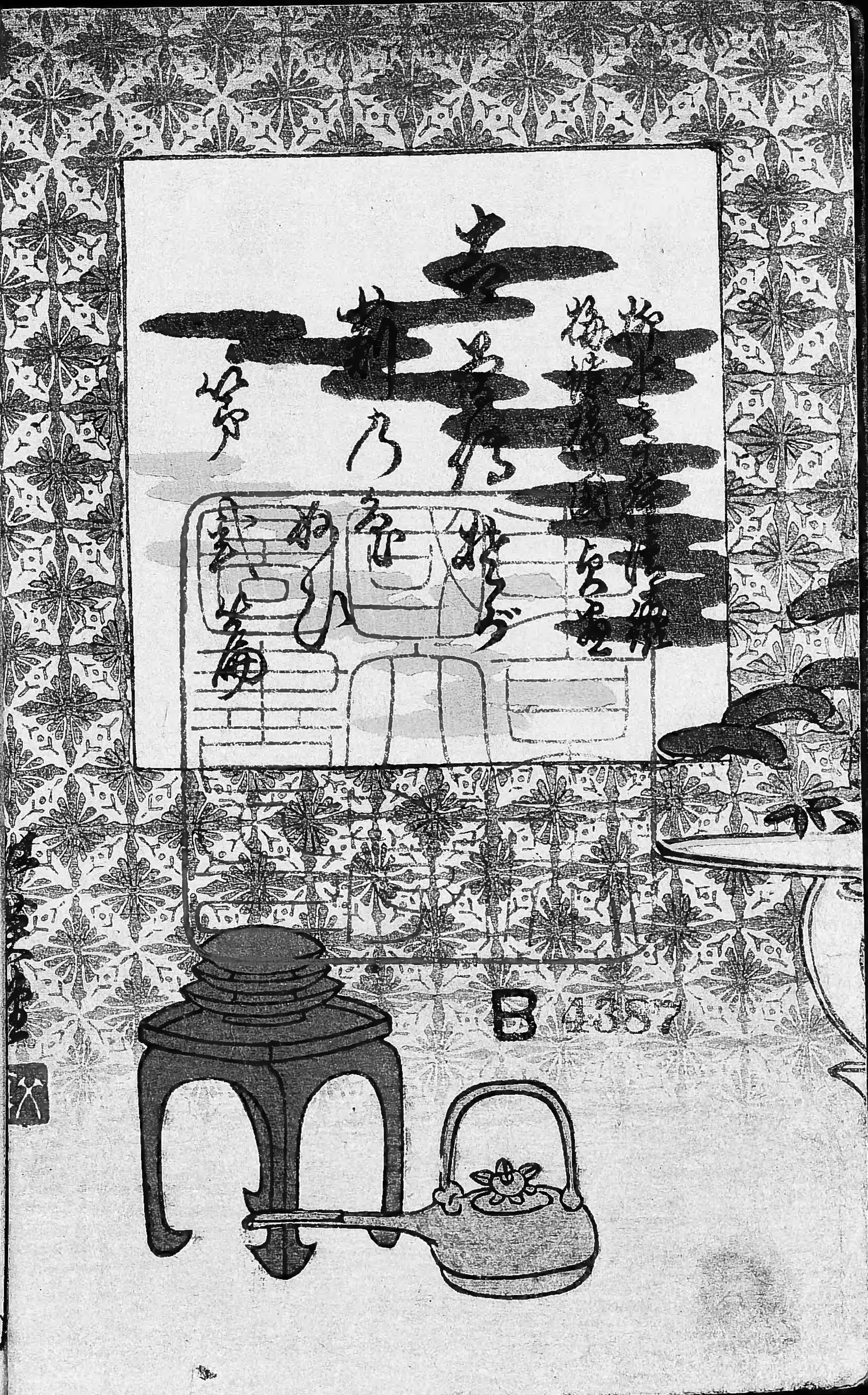
E 24
205

鬼娘手濃衣

二冊入

巻

B 4387



小袖曽我薊色縫 弐編 上

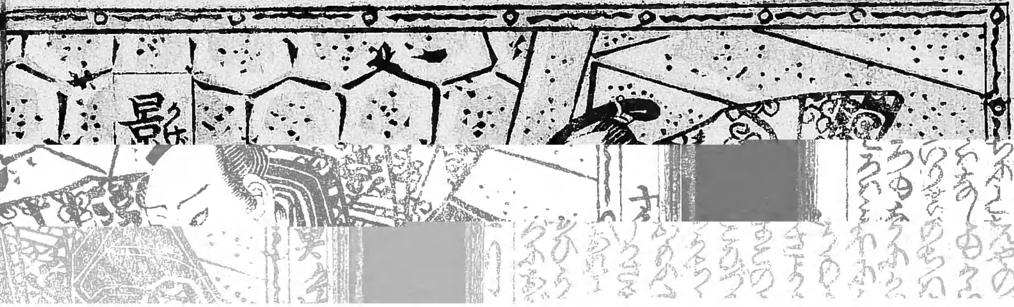
種清綴
國貞画

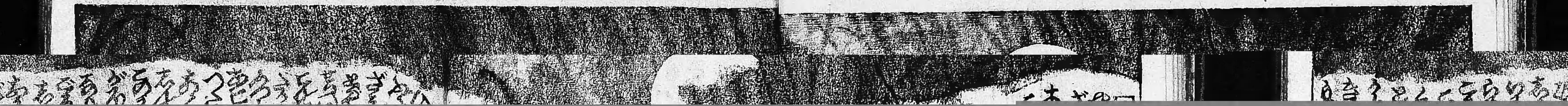
紅英堂梓

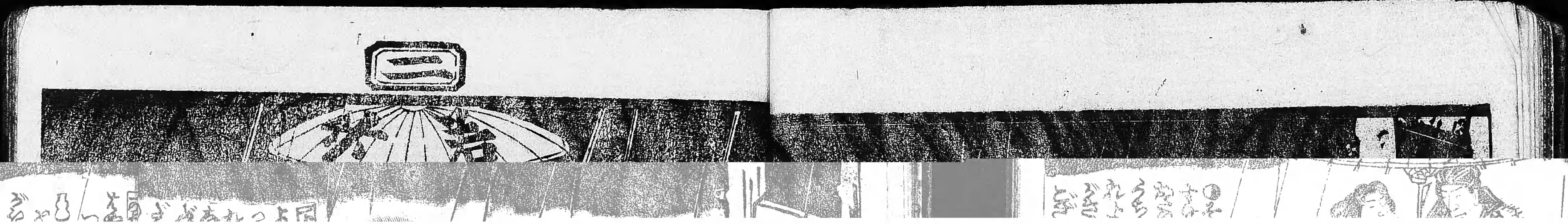
[illegible]

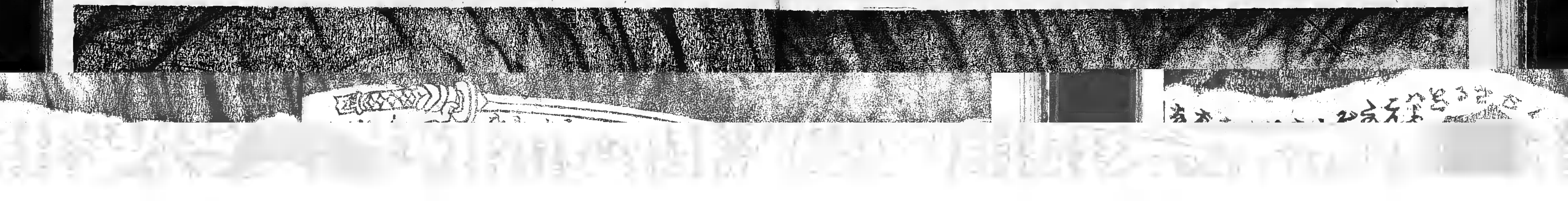
八重垣紋三
逸之進娘お雪
景山娘

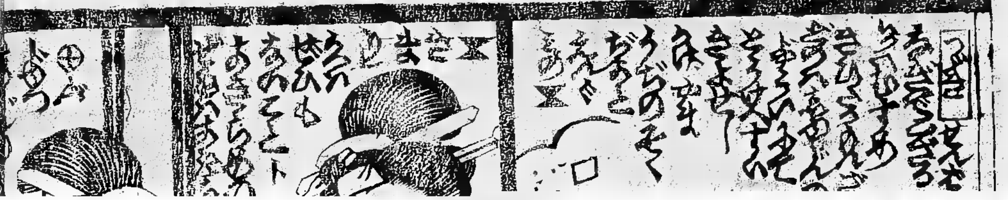
[illegible]

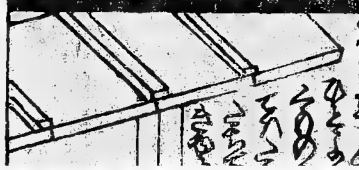


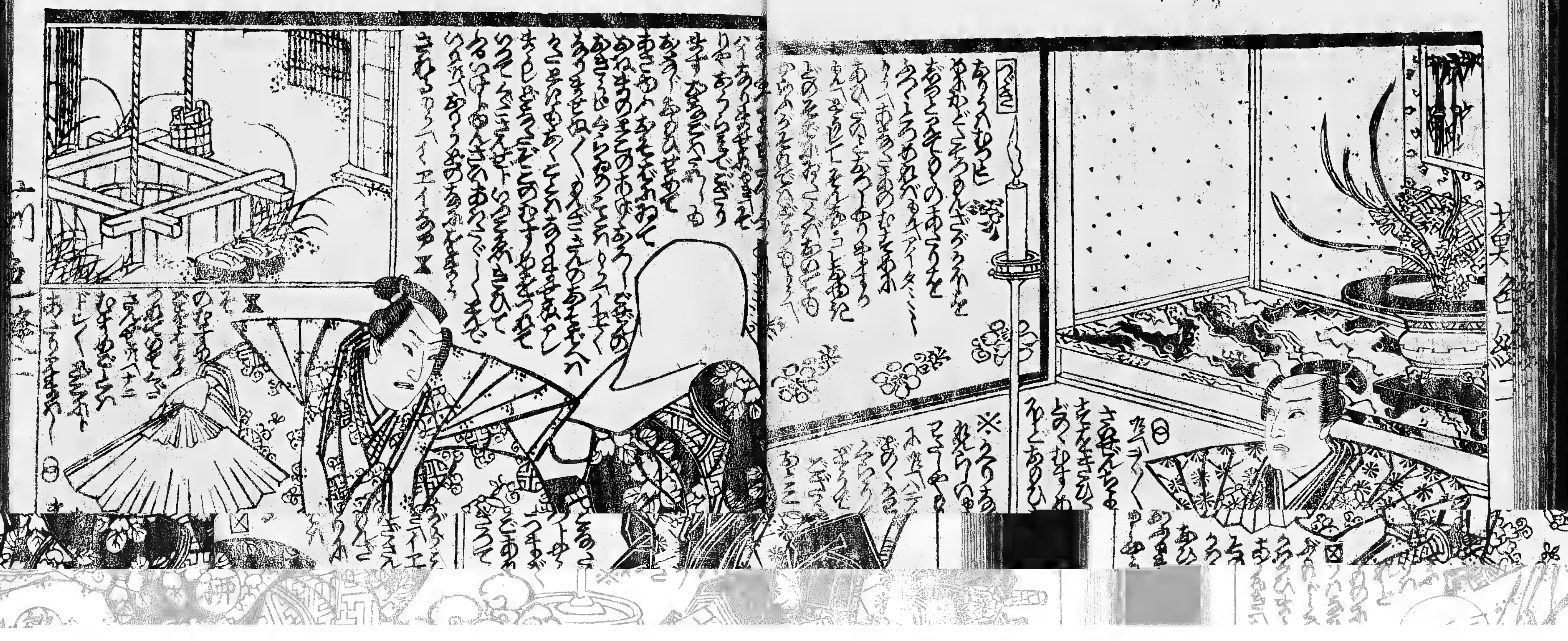


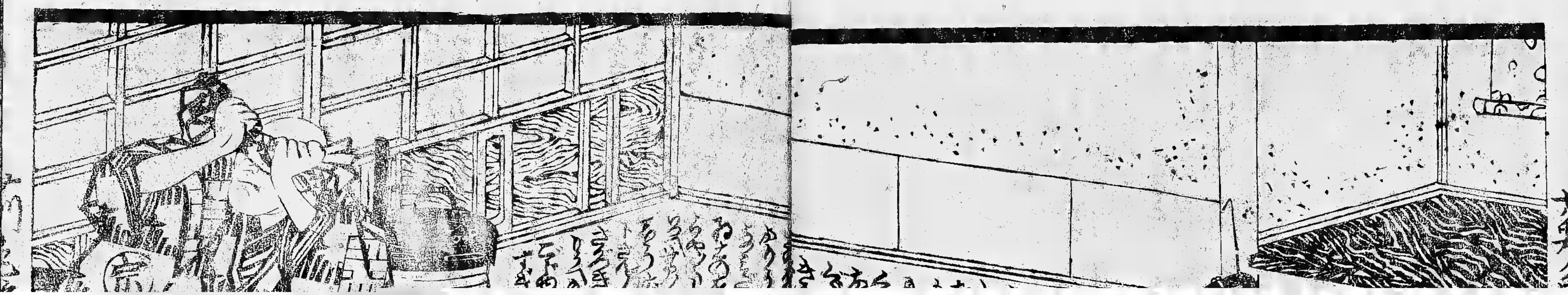




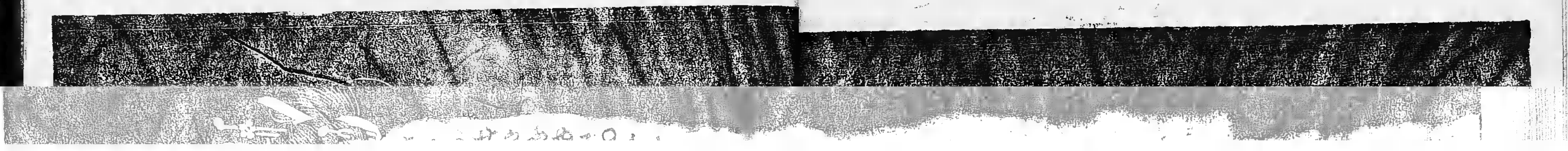


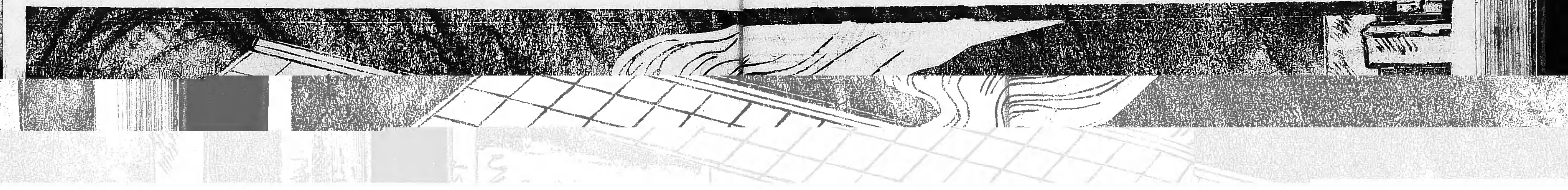



つゞき



ト武ちのゑきめと
まうすか。イヤな
さあらばとおのけらいを
きかぜわかでくださるまいか
武こうのそれまうすっコリや
まちてちゝそのみつうへさらく
みのかりてさう、いまさらていきと
みそうせ へうつてまうすっし
あたゆへらうちんをまゐこまするう
武イヤく それならでもけいへ
ハツトいふて六ずけへまつる事
きくろうもく 武むでよあ
けらいをまねきけくるう
あきらへさるでさせんの
中へかやくそのぜんまうと
ぜのおおまぞおらいはそぐまつて
くさきうまを武部とさ
まうざまかまれとのあれ
さてこそぐきいつくあのもうを
もん井、かりーふいまおいくるまで
かんさなくいかんのきうへきる
たあくいひうてまされ
あらいおなかつて
あづらいはうんを
つうわうまちまさるまつまめぐろう
でんくろあくいはまおまおふ
までしまうくあいくくとそでさるん
ぜ每くわ男あれまかへあきこのあ
まきのそろへうる





初編 は猶をとも知

さんと鬼門が郎へ入る

菟路の郷原の儀へ

違が怨を継ぶ須貌

向の藤巻蓑實毎

きく長兵衛の使

出すれども織絹

が母綱すく同界

天地を尊く程を

忽孔まで助

せ 二編 にあるが

報ふ其戦助る

藤本は猿猴に

羽が忠義の

き勧に操と

の簡

めず足井姫が前身

二編 に續く

解きが文使

三編 へ所る

が生別

ね、文て

の物語の織をうに

水不

四編 の

寄贈　大正十三年八月三日　高橋□□郎氏

去る墨流の助けり、堀川の鏡氏遊覧に出で、義政公に祝兄冬を 十一編 の巻を開く
と共に、鏡図寺の茶器を盗み去り、足利氏と結びて、絶えて久しき叢の桐を窺ふ
せし、其の折りは兄弟ともに、足利姫が巧言をもて、山名の桂の木を避け、小
槙姫を廳所へせんと謀る 八編 義政公これを聞きて、郡の小試に叶ふ
本年は、其の様子違ひて小桐を捕へ、一月中に子を儲けさせれ、依て小槙
姫が伴へ中々に、姫が下に出で、宮中まで妹のまま聞きて、女の身ながら、帰らんとて其の
譲り合ひ 九編 よりして、守土林兄弟にも、二月が雲にかくれて暮せる
妻で、小槙姫を殺害すべし、ようやく見えし十編 より六月より義親を従へて、足利
姫を奪ひし山寺へ来たり、乙の森に来ると、小槙姫の事ありて帰りて
義政は閑居に東山へ隠れて、其まで入りし十一編 東山殿を殺せんとする陰謀
何をか其義政一度天王山に躱されしを、足利道親これを救ひ、堂島の大橋にて
大修羅場 十二編 八幡の橋野あり、浅之助が帰りに代りて、若き殺し、六月
義政妹に折る、ますます野の単衣を被て、琵琶の湖水を出で、浪はあと紛れ五
桂の家を絞り、精米様ひて、相を得たり、今編にあれば、世にも衣も郷の精しく
高まるを乞ふ

板元　紅英堂敬白

新板稗史標目

旅雀我好話　上下二冊　種清録　國貞画
八重撫子累物語　二冊　仙果編　國貞画
花兄梅雅物語　二冊　西馬録　國清画
春柳錦花皿　二冊　一九文賦　芳綱画
一もん大肥 千歳の松臺　名高對男　全一冊　種清録　国貞画
敵討亀山噺　全一冊　種清録　國貞画
塩屋艶文正　榮花譚　同　仙果作　国輝画
公平船木偶嬉言　上下二冊　同作　国芳画
開鬼門名代港　前篇上下　後篇上下　同作　國輝画
連理廻山雑奇録　上下二冊　西馬録　芳綱画

地本草紙問屋
南傳馬丁壹丁目東側
紅英堂　蔦屋吉蔵梓